

第5回 丹沢大山保全・再生セミナー

開催報告



平成16年12月17日(18:30~20:30)にかながわ県民活動サポートセンターホールにおいて、「第5回丹沢大山保全・再生セミナー」が開催されました。このセミナーは、総合調査に関する情報共有や情報交換を目的として、丹沢大山総合調査団が毎月第3金曜日に開催しているものです。第5回は、調査団関係者や丹沢に関心を寄せる県民のみなさん、105名の方にご参加いただきました。

今回のセミナーでは特別セミナーとして、木平勇吉・丹沢大山総合調査 調査企画部会長から「県民参加による環境保全計画の作り方」という講演がありました。また、後半には情報整備調査チームから小池文人・チームサブリーダーと両宮有グループリーダーから、それぞれ「市民による環境保全活動とGISの活用」、「GISとはどんな技術か? - 基本知識とその利用について -」という内容の発表がありました。

各発表の概要は以下の通りです。

(1) 特別セミナー

「県民参加による環境保全計画の作り方」

木平勇吉 丹沢大山総合調査 調査企画部会長
(日本大学生物資源科学部森林資源学科教授)

この総合調査には、「水、生物、経済が循環する丹沢の再生」「問題解決型の調査」「県民参加による開かれた調査」という3つの基本方針があります。この中でも今日は、「県民参加とは何か」ということを提案したいと思います。

県民参加の第一条件は、自分の問題として、自分たち県民が主役だという自覚を持って、自分たちで責任を果たしていこうという基本的な姿勢だと思います。これは、行政依存や行政批判、批評家、ということとは対極にある考え方です。そして、参加すること自体が最終目標ではなく、参加して話し合い、理解を深



めることによって、ある一つの合意に到達するということが一番のねらいだと思います。県民参加型のやり方というのは、時間もお金も労力も大変かかります。そしてなかなか物事が決まらないということがあります。しかしそれでもやろうというのは、県民一人一人の意見が尊重されるような市民社会を作ろうという考え方が根底にあるからです。現在、「市民の意見尊重」や「国民に開かれた」という美しい言葉が使われることがよくありますが、これが実質化するかどうかは県民参加の最終的な目標です。

従来型の調査の多くが専門家や行政官の主導権のもとに行われていましたが、これからは新しい県民参加の社会体制へ転換しなければなりません。「なぜ県民参加なのか」ということの第一の理由は、私たちの社会は意見の異なる人々で構成されているからだということです。かつて森林の管理には、木材を生産し林業所得を上げ、林業従事者の所得を上げようという明快な目的があったので、それぞれの林業技術者が一番効率的な方法を実行することで解決しました。しかし現在目の前にある環境問題では、多くの人の価値観を反映させていかなければなりません。価値観の問題は技術だけでは解決できません。環境は誰のものでもない、私たちみんなのものであります。そして今生きている私たちだけでなく、次の世代にも引き渡さなければなりません。また、地域の差や個人の差の不公平を少しでも解消し、公平に環境の恵みを受ける社会を作っていかなければなりません。つまり、環境についての市民の倫理観というものが豊かな社会を作り出すのではないかと思います。

環境保全の丹沢スタイルということで私は、「丹沢の生物と景観に順応した工法の採用」「水源と生態系で結ばれる流域社会という視点」「環境教育と自然解説の充実」ということを希望しています。これらが分散・自立したネットワーク型の活動で実現していけたらと思います。このような活動の中で、丹沢周辺地域のコミュニティーが創造され、そこには大都市の市民も参加するという形が理想だと思います。

(2) 情報整備調査チーム

「市民による環境保全活動と GIS の活用」

小池文人 情報整備調査チームサブリーダー／県民向け情報提供活用グループリーダー
(横浜国立大学大学院環境情報研究院助教授)



GIS(地理情報システム)はよく、環境評価マップをつくる際に使われます。環境評価マップをつくるには、まず参加者みんなで話し合って、大事な場所やどんな自然を残したいかということを一覧アップします。そして、種の出現頻度を調べて指標種を選び、野外調査を実施します。その結果を持ち寄って、例えば近くの生涯学習センターなどにあるパソコンにフリーのGISソフトを入れて、みんなで解析をすると、植物のマッピング結果ができます。さらに、その結果に種によるウエイトをつけて評価をつけるとホットスポットなどがわかる地図ができます。また、昔の地図にそれを重ねると、昔草原だった場所は今住宅地になってしまっているとか、生態系として大事な湿地だという評価が出たところ

は、やはり明治時代から湿地だった、というようなことがわかったりします。重要な湿地がわかったら、そこだけを大事にするのではなくてその上流の集水域や田んぼも大事にする必要があるのではないか、ここが住宅地になってしまっはダメなのではないか、というようなことも議論できます。

また、アライグマの分布の拡大予測をするような場合も使えます。現在の状況から、将来どう拡大していくかをシミュレーションすることができますし、対策を考える場合にどの個体群から除去していくかということを検討することもできます。もっともコストがかからない方法や、何年くらいのスパンで対策を考えていくかということを検討するときの材料にもなります。

調査のステップには、調査の提案・企画、調査の手伝いや自分達の調査実行、結果の解析、対策の立案ということがあります。よく市民参加で調査をしても、その結果を GIS 技術者が解析して環境評価マップをつくり、それを市民に戻すということがあります。しかしそうではなくて、みんなで野外調査もやって、みんなで評価地図作りもする、自分達の手でやるのがいいのではないかと思います。そのように誰でもみんなで GIS を使って自由に解析できるようになれば良いと思っています。



会場の様子

「 GIS とはどんな技術か？ - 基本知識とその利用について - 」

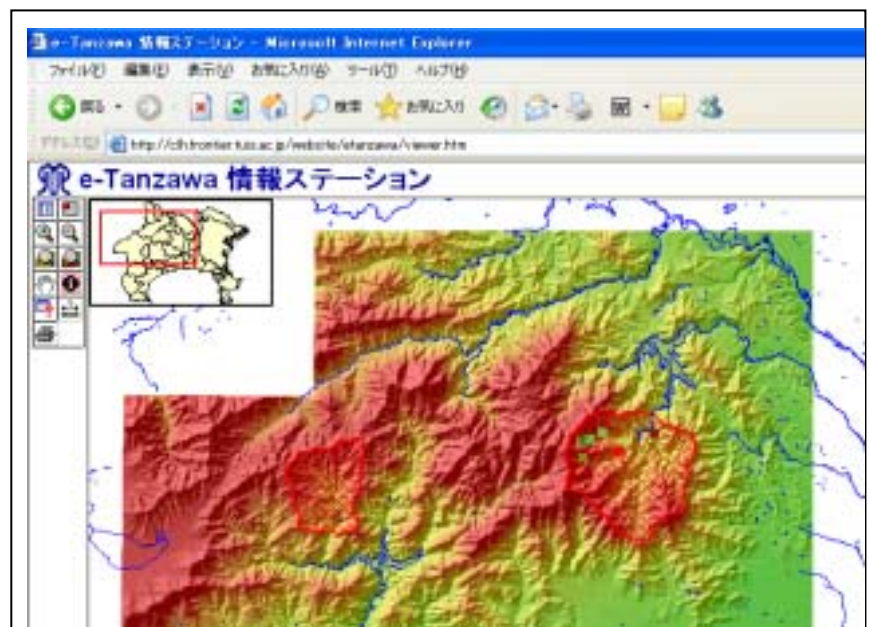
雨宮 有 情報整備調査チーム 自然環境情報ステーション設計・整備グループリーダー
((有) GIS インスティテュート代表)



GIS は、違う種類の情報をうまくまとめて地図などの目に見える形にして、立場の違う人同士の理解を深めたり、議論や試行錯誤をしていく場合にとても役に立ちます。具体的には、コンピュータの中に、私たちが理解したいと思っている場所の仮想世界を作ります。そしてその世界を構成する要素（地形や道路、生きものの分布情報など）を透明なシートの上に描き、それを重ねて全部を通してみるとその世界がコンピュータの中に再現されます。そして起こっていることを人間が理解している範囲で数式で表して入れてみると、この世界で今何が起こっているのか、これからどうなるのか、ある部分が変わったらどうなるのか、ということがわかってきます。GIS を使って何ができるのかということも大事ですが、これから知りたいことを理解するための基本になるデー

タをどう集めてくるのか、といったことにも注意を払わなければなりません。そして、これから実行することが本当に正しいのかどうかを検証するためには GIS のデータをいつも新鮮な状態に保てるような仕事の仕組みを作っていかなければなりません。

現在、インターネットを通して、丹沢地域で現状がどうなっているのか、調査がどういうふうに進んでいるのかということが誰でも見られる「e-Tanzawa web」という環境を整えているところです。公開されれば、インターネットに接続できる方であれば誰でも、このページをごらん頂くことができます。たとえばモニタリングサイトの地図が見たいとか、この川の流域の地図を出したいというように、地図の表示している範囲や見ている人の関心の内容に地図を切り替えて、情報を自分でどんどん取り出していくことができるように整理したいと思っています。この中に、これから得られる調査結果がどんどん入っていきます。神奈川県で過去何十年かの間に蓄積されてきた調査結果も、順次整備して追加していく予定です。また、ボランティアのからが今まで蓄積されてきたようなデータをいただければ、今この地域がどうなっているのかという現況とともに見ていくこともできます。公開されたらぜひご覧いただいて、丹沢大山というところがどんなところかを知る手がかりにさせていただきたいと思います。



e-Tanzawa Web の表示例